

書評

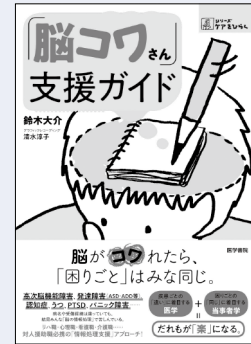
《シリーズ ケアをひらく》 「脳コワさん」支援ガイド

鈴木大介 (著)

A5判・226頁

定価：本体2,000円＋税

医学書院、2020年



すべての対人援助職が読むべき “明日から活かせる技術”が詰まった一冊

[評者] **峯尾 舞** 北原国際病院リハビリテーション科・就労支援室(作業療法士)

私が鈴木大介氏に初めてお目にかかったのは2016年9月だった。『脳が壊れた』(新潮新書、2016年)に描かれている高次脳機能障害の描写に感激し、出版社に問い合わせ、実現した。

その後、何度か対談をさせていただき、鈴木氏のお話が非常に具体的であり、なおかつ豊富な工夫や対応策にあふれる実行可能な内容であることがわかった。私は、鈴木氏の経験や工夫を多くの「脳コワさん」本人や家族、リハビリテーションスタッフ等に伝えたいとかねてから思っていたため、本書の出版は、心から待ちわびたものだった。

「脳コワさん」とは

本書では、「病名や受傷経緯などが異なっても、脳に何らかのトラブルを抱えた当事者」を「脳コワさん」と定義している。

私は作業療法士として医療機関に勤務しており、主に脳血管疾患や頭部外傷受傷後等の方々の就労支援を担当していることから、日々、多くの「脳コワさん(高次脳機能障害者)」に出会う。彼らから、退院後に、障害名として定義

されていない多くの困難があることを聴くと、「脳コワさんのお困りごとは、ハード面・ソフト面共に整備された医療機関内での生活では露呈しないのだ」との思いを深くする。そして「私たちは脳コワさんの高次脳機能障害を見落としているのか」と自らを振り返らざるを得ない。

「脳コワさん」の生きる世界が見える

鈴木氏は以前から「自分は奇跡のスーパー当事者ではない」と語っているとおり、本書でも「わかりやすさ」と「再現性」に重点を置いている。特に高次脳機能障害を説明する豊富な比喻は、医療者が患者や家族に病状や退院後の生活について説明する際にも活用可能である。その一例を以下に抜粋する。

***なぜ相手の話が聞き取れないのか？**

《「水を筆につけて、白い半紙に字を書いたらどうなるか」を想像してもらえたら分かりやすいです。どんどん乾いて、何を書いたかすぐに分からなくなってしまうですね。》(21頁)

***なぜ退院後に町を歩けないのか？**

《病院を一步出た外に広がる当たり前の日常生活は、膨大な情報や雑音、予測しない突発事態が入り乱れる「情報の乱気流」環境でした。》(64頁)

コミュニケーションの手がかりに

このように「脳コワさん」には、診断名・障害名では表現されていない困りごとがある。私たち医療・福祉に携わる者はこのことを認識し、丁寧に聴き取り、全肯定したうえで「脳コワさん」とともに対処方法を検討する必要がある。ぜひ本書を、目の前の「脳コワさん」とのコミュニケーション、在宅生活や就労場面に関するアドバイスをを行う際の手がかりにしていきたい。

いつ、だれが「脳コワさん」になってもおかしくない。本書は「脳コワさん」と、医療職を含めた対人援助職、そしてすべての人の相互理解を促そうとしており、少しでも生きやすい社会をつくるための“道しるべ”にもなると思う。